

実践報告

児童の学習習慣を確立させ、 主体的に学習に取り組む態度を育む指導実践 — 自主学習を実現するための 基礎的段階における指導に着目して —

明比宏樹

I 主題設定の理由

現行の学習指導要領において、児童の学習意欲の向上や学習習慣の確立、見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動が重視されている。しかし、日本はこれまでのPISA調査においても、成績は上位に位置しているものの、「勉強が好きだ」と思う児童が少ないなど、「必ずしも学習意欲が高くないこと」、「学校の授業以外での学習時間が少ないこと」、「学習習慣が十分身に付いていないこと」が大きな課題とされてきた。「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会（文部科学省平成26年）」においても、「学習意欲や自立の意識に課題があることを踏まえ、単なる受け身の教育ではなく、主体性を持って学ぶ力を育てることが重要である」と示されている。

「児童は、学校で学ぶ価値を見失っている」。これは、日々の学校教育に携わる教育者としての実感である。また、日本においては、ただ単によい成績を収めることが社会的・経済的に有利な立場をもたらすわけでもなく、学校歴を積み上げても将来が保障されているわけでもない。このような現代において、児童は「将来への投資としての学び」に対する価値を感じたり、意欲を持ち続けたりすることができづらい環境になっているのではないかと考える。また、藤沢（2002）は、児童の自律性を奪い、テスト対策として学習内容の絞り込みを行い、テストに出るところ以外は学習しないという手抜き態度を醸成させているのは、「宅配教材や家庭教師・学習塾などの教育産業だけではなく、教師が授業中に試験の出題内容を教えたり、暗記材料を提供したりして、学習内容を限定してしまうことも含まれる」¹と述べている。このような態度が中学校での定期テストにおいても、必要なことを一夜漬けで丸暗記し、テストが終われば学習内容は記憶から消えてしまうという悪循環につながっている。このような現状を踏まえ、持続可能な自主学習を実現するための基礎的段階として、4つのスモールステップを取り入れた自主学習ノートの指導を継続して行うことを通して、児童の学習習慣を確立させ、主体的に学習に取り組む態度を育むプロセスを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究の目的及び理論的基盤

1 自主学習の定義と研究の目的

本研究のイメージは、図1の通りである。

今回の実践では、自主学習を「児童が自主的に学習する内容・範囲・時間を決めて、継続的に取り組む家庭学習」と定義して、小学校第5学年を対象に研究を進めることとした。本研究においては、自主学習ノートを活用した指導を通して、自主学習を実現するための基礎的段階の指導プロセスを明らかにするとともに、指導実践が児童の学習習慣の確立と家庭学習における主体的な態度を実現する上で、どのような教育的効果をもたらすのかを考察することを目的とした。自主学習を実現するための基礎的段階においては、「STEP1：なれる」・「STEP2：つかむ」・「STEP3：工夫する」・「STEP4：デザインする」の4つのスモールステップに沿った指導を継続して行い、本研究の目的を達成することを目指した。

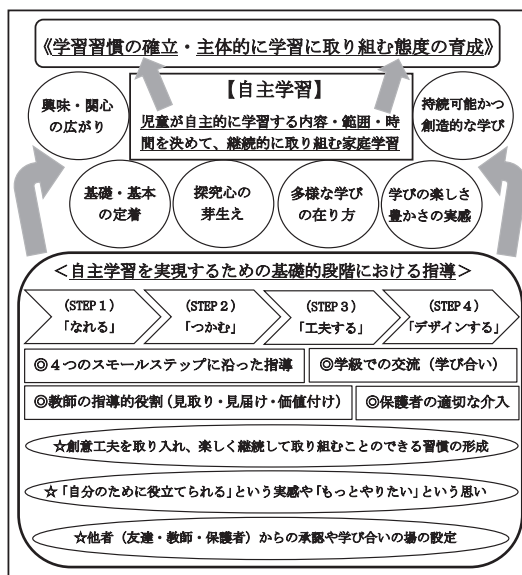


図1 本研究のイメージ

2 本研究における理論的基盤

藤村・杉本(2019)は、家庭学習における分類について、小林(2009)を参考に「家庭学習は、一般的に宿題と宿題以外の家庭学習に大別される。宿題は、教師の直接的な指示・管理の下に行われる家庭学習であり、基本的に授業の一環として行われる。また、宿題に対しては、教師が点検・評価・事後指導を加えることが多い。他方、宿題以外の家庭学習とは、教師の直接的な指示を伴わない自学自習である。これに対しては、教師による内容や提出期日の直接的な指示・対象とはならない。しかし、自主的な学習としてふさわしい内容の例示や計画づくりの指導、励ましなどが行われることもあり、必ずしも教師の無関与を前提とした学習ではない。」²とまとめている。

この藤村・杉本(2019)の家庭学習における分類から考えると、本実践における「自主学習」は、宿題以外の家庭学習に位置付けられる。自主学習は、「興味関心の広がり」、「基礎・基本の定着」、「探究心の芽生え」、「学ぶ楽しさや豊かさの実感」、「持続可能かつ創造的な学び」を実現する上で、非常に有意義なものであると考える。今回、小学校高学年の発達段階を踏まえ、自主学習を実現するための基礎的段階における指導過程において、「4つのスモールステップに沿った指導」、「教師の指導的役割(見取り・見届け・価値付け)」、「学級での交流(学び合い)」、「保護者の適切な介入」を取り入

れた。筆者はこれまで、全国学力・学習状況調査の上位県に倣って自主学習を定着させようと無理に「自主学習ノート2ページ」と宿題に出してしまうこともあった。しかし、自主学習を実現するための基礎的段階における指導においては、強制力の行使ではなく、「創意工夫を取り入れ、楽しく継続して取り組むことのできる習慣の形成」、「『自分のために役立てられる』という実感や『もっとやりたい』という思いの表出」、「他者（友達・教師・保護者）からの承認や学び合いの場の設定」が重要であると考えた。そこで、自主学習ノートに4つのスモールステップ学習を位置付け、各ステップにおけるめあては提示するがあくまでも取り組む内容や頻度は、児童に委ねることとした。

Ⅲ 研究の実際

1 各ステップの指導実践

(1) 4つのスモールステップの流れ

年度当初いきなり自主学習ノートを手渡しても、戸惑う児童がほとんどである。それは、児童の中に「自主学習の文化」が根付いていないからである。「自主」という言葉がつくと、どうしても放任になってしまいがちな部分が出てくる。だが、自主学習を一人で取り組むものにするのではなく、学

表1 各スモールステップのめあて

ステップ		めあて
1	なれる	○約束事を守ったノートにしよう。
2	つかむ	○振り返って、わかりやすいノートにしよう。
3	工夫する	○取り組んで、楽しいノートにしよう。
4	デザインする	○「+α（プラスアルファ）」のノートにしよう。

級経営のベースに位置付け、「学級みんなで共有する学習として自主学習に取り組むとき、それは一人きりの学習ではなく、学校での学びと地続きとなった学習となる」³（伊垣2012）のである。江森・高野（2017）は、中学生を対象とした研究において、生徒が主体的な家庭学習を行うためには、「学習とは何かを教師と生徒が共有した上で、生徒が学習課題を自ら設定し、学習方法を意図的に決定するための支援が必要になる。」⁴と述べている。本研究は、自主学習を実現するための基礎的段階における指導であり、小学校高学年を対象とした実践であることを鑑み、4つのスモールステップに沿った自主学習ノート作成上の約束事となる「めあて」を提示し、自分オリジナルの自主学習ノートの取り組みを通して、学びの成果につながる手応えと充実感を得られるように各ステップにおいて様々な工夫（教師の指導的役割）を取り入れた。

(2) STEP1「なれる」

まず、自主学習のやり方を細かく明示したプリントを児童に配布し、説明を行った。また、自主学習ノートを作成する上での約束事として「①日付を書く、②開始時刻と終了時刻を書く、③めあて（学習する内容）を書く、④振り返り（わかったこと・できるようになったこと）を書く、⑤おうちの人にサインをもらう、⑥先生に提出する」の6つを設定した。

このように、ある程度の約束事を決めてパターン化することで、自己の振り返りと教師からのフィードバックを適切にすることができ、学習習慣を身に付けさせる上でも非常に重要であると考えた。これまで、自主学習に取り組んだことのなかった児童も取り組む意義や方法を理解し、慣れていくことで自主学習ノートに対して大きな抵抗を感じることなく、スムーズな習慣化を図ることができるようにした。

ノート指導においては、まず「きちんと6つの約束事が守れているか」、「児童が自主学習をするにあたって、困っている点はどこか」という視点に主眼を置いた。日付や開始・終了時刻、めあて・振り返りを記入することは、後で見返した時に、「自分はどんなことを学習し、身に付けたのか」という記憶を呼び起こすためのエピソードとして非常に重要である。また、学習のめあてを自分で決めさせることで、自分に取り組むべきことや興味があることが明確となり、課題意識を持って学習に励むことが期待できる。そして、今日の自主学習を通して、わかったことやできるようになったことを自分でメタ認知し、振り返りとして記入して残すことで、より深い学びを実現することができた。

(3) STEP2「つかむ」

「つかむ」では、「振り返って、わかりやすいノートにしよう」というめあてを提示して取り組ませた。自主学習の大きな課題は、「何となくやった感が出て、形だけの達成感がある」ということである。自主学習においては、学力の定着を目指すことも大切であるが、「興味・関心の幅を広げる」、「自分なりの楽しさを見い出して、取り組む」、「いつでも振り返りができるように、充実させる」という多様な視点も要素として包含されている。



図2 STEP1「なれる」におけるノート

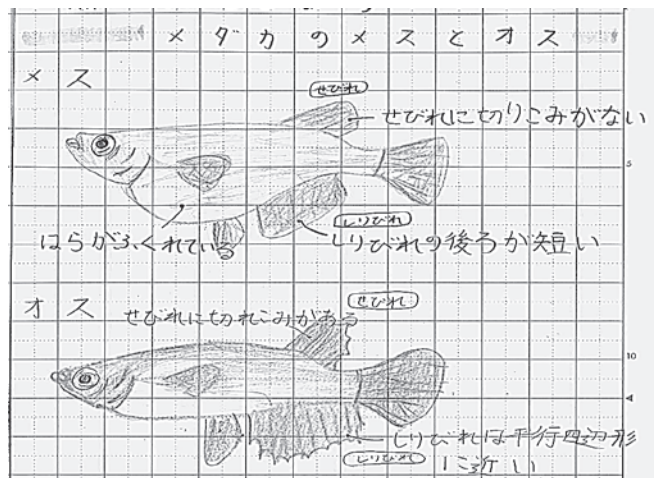


図3 STEP2「つかむ」におけるノート①

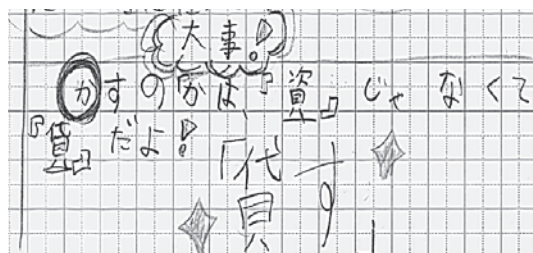


図4 STEP2「つかむ」におけるノート②

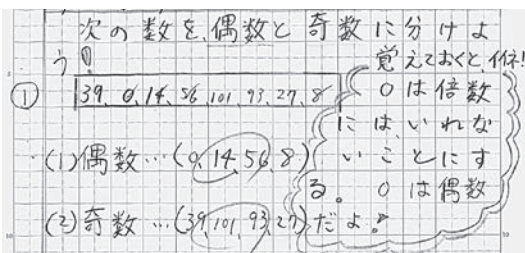


図5 STEP2「つかむ」におけるノート③

また、自主学習はやったらその日で終わりという、一話完結型ではなく、持続可能なものでなくてはならない。学習したことをいつでも振り返り、何度も見直して反復することで、ようやく学習したことや調べて知ったことが身に付くのである。そのためには、「自分が後で見返しても、何を学習したかが一目でわかる工夫」をしないといけないことを指導した。児童は、大事なキーワードを強調してまとめたり、自分が間違えやすいところをピックアップしたりしていた（図4・5）。また、イラストを使ってポイントをまとめ、テストの前などにすぐ復習できるようにしている児童もいた。

(4) STEP3「工夫する」

「好きこそもの上手なれ」という言葉があるように人間は、何事も好きなことや得意なことに対しては楽しく取り組むことができ、継続することができる。児童が、日々の遊びの中で自然とルールや場の設定を工夫し、面白さの拠り所を見い出しているように、自主学習もテストでの成果ややりがいと同時に楽しさの追求も不可欠であると考えた。そこで、STEP3の「工夫する」では、「取り組んでいて、楽しいノートにしよう」というめあてを提示した。これまでのステップで、既に「自分なりの楽しさ」を追い求めて様々な工夫と努力をしていることを学級担任として感じていた。そこで、学級全体で共有すべく、朝の時間に「自主学習ノートを楽しく取り組むためには？」というお題でワールドカフェを行い、様々な意見やアイデアを出し合わせた。また、各自の取り組みを紹介し合う中で、「オリジナルのキャラクターを登場させて、自主学習物語を作った（図6）」、「テスト前に、タブレットで実験動画をおさらいしながら見てまとめた」、「予習や復習だけでなく、好きなことをとことん調

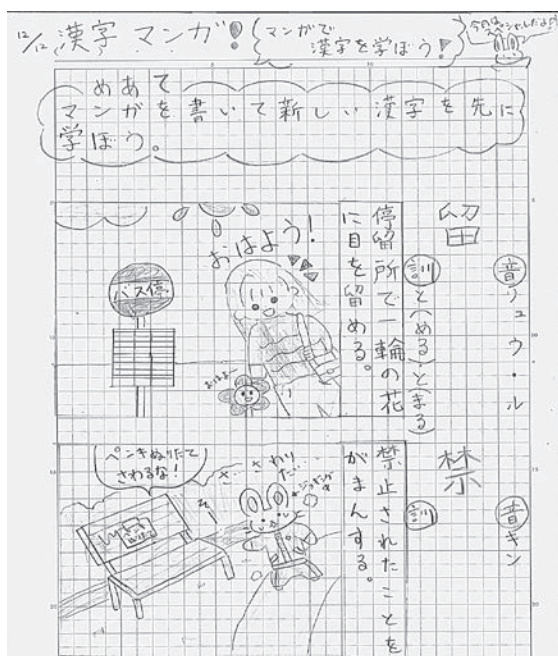


図6 STEP3「工夫する」におけるノート①

べてみた」という意見が出てきた。だが、児童一人一人の「楽しい」の基準や価値観はそれぞれ異なっている。「自分なりの楽しい」が自主学习ノートに表れてくると、主体的に学習に取り組むことの素地が育まれると考えられる。

(5) STEP4「デザインする」

「デザインする」では、自主学习の学びを自分の手で創り出すことに重点を置いて、「+αのノートにしよう」というめあてを設定した。書店の学習コーナーに行くと、「マンガで学ぶ○○!」、「おもしろ図鑑で丸わかり!」という類の本がズラリと並んでいる。それだけ人気で、学習者側の食いつきもいいということであるが、自主学习においては何より、「またいつでも読み返して、復習したい」という意欲を喚起できるノート作りをする力を育むことで、学びの連鎖が可能になるのではないかと考えた。児童は、理科の学習内容をマンガを作って、吹き出しに大切なポイントをまとめたり(図7)授業中に教師が行った口頭での指示や大事な箇所の説明などを思い出しながら作成したり(図8)して、「自分なりの+α」を見つけて自主学习ノートをデザインすることができていた。

(6) 教師からのフィードバック

以上のような、4つのステップに沿った指導を効果的かつ効果的に行うためには、適切な教師からのフィードバックが不可欠である。本実践においては、自主学习ノートに取り組んできた児童には、毎回振り返りコメントを3行以上書いて返却するようにした。自主学习ノートは、児童からの一方通行のやり取りや児童任せという位置付けになりがちであるが、自主学习に対する取り組み姿勢を通じて児童一人一人の思いや悩みを受け止めることにもつながる。また、各ステップにおいて基



図7 STEP4「デザインする」におけるノート①

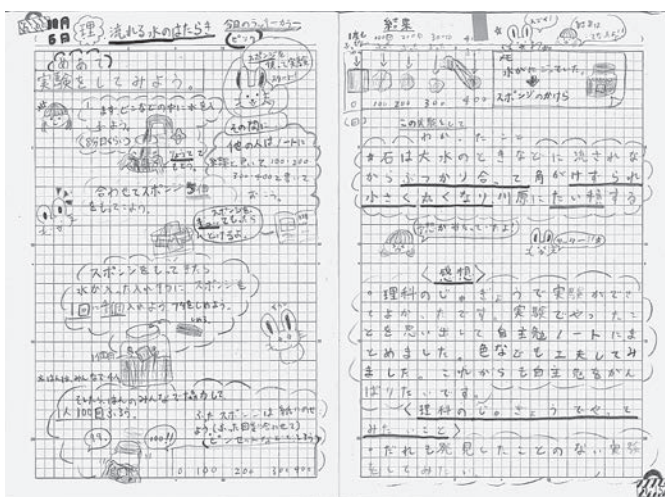


図8 STEP4「デザインする」におけるノート②

準となるめあてを設定しているため、できていること（事実）に対する肯定的なコメントと課題解決に向けた方策をコメントの中で提示できるようにした。このようなフィードバックは、時間と労力がかかるが、見逃してはいけない非常に大切な部分であり、学習に対する安心感や教師と児童の強固な信頼関係を構築するためのツールとして非常に有効であることがわかった。

(7) 保護者の支援と見届け

南（2015）は、「自ら学ぶ力や習慣を確立することによって単に知識や技能を定着させることだけでなく、身に付けた知識・技能を基盤として自ら課題を見つけ、学び続けていくことは、ひいては生涯学習につながる能力を身に付けていくこととなる」⁵と指摘している。また、「自分から家庭学習に進んで取り組む態度や授業に熱心に取り組む態度の子どもほど、エフォートフル・コントロールが高く、母親が日常的支援をすることが多いこと、成績を他者と比較したり、よい成績を取るよう圧力をかけることは少ない」⁶（水野 2019）と言われているように、自主学習だけでなく、学習におけるあらゆる面において保護者の適切な介入は不可欠であり、重要である。今回の自主学習ノートの取り組みの強みは、6つの約束事の中にも提示して

いるように、保護者を児童の自主学習の評価関係者として位置付け、フィードバック評価に参加させることができる点である。天笠（2013）は、「家庭学習の成否のカギを握るのは、子ども自身であるとともにやはり保護者であって、保護者に自覚を促すという観点からどこまで迫れるかがポイントとなる」⁷と述べている。今回、自主学習ノートに取り組んだ後は、「必ず、おうちの人に見せてサインかコメントももらうこと」を約束事の一つにしていたため、保護者が児童の自主学習ノートに寄り添い、取り組みに対する励ましと適切な助言、理解度の確認などをしてくれていること（図9・10）をうかがうことができた。児童も、教師を含めて評価者が複数いることで、モチベーションも高まり、自主学習に対する意欲も目に見える形で向上した。

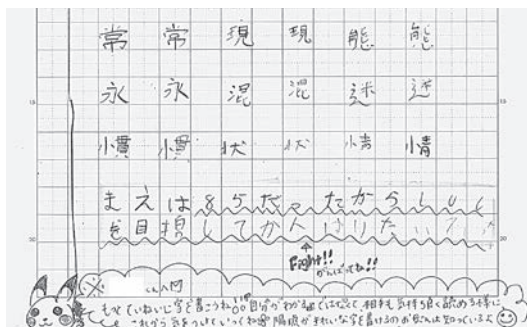


図9 保護者のコメントと評価①

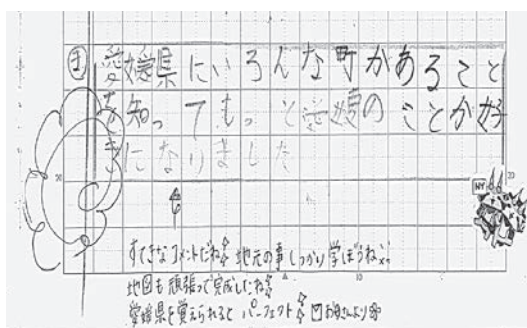


図10 保護者のコメントと評価②

2 「自主学習ノート交流会（学び合い）」の実践

堀・仙洞田・芦澤（2014）らは、児童が主体的に自主学習ノートに取り組むために重要になる点について、「自らの活動を適切に意味付けかつ、価値付けを行い、それをもとに改善していくことの必

要性」⁸を指摘し、そのために「自分の現在の状況を的確に見取ることが必要になってくる」⁹と述べている。今回、適切な自己評価はもとより、学び合い、高め合う自主学習ノートの在り方を充実させる上で、クラス内および異学年（2年生）との交流を取り入れた。

(1) クラス内交流会

自主学習は、「個人の学びの追求」と同時に学級のみinnで取り組んでいるよさを鑑みた「学級全体での学びの追求」をすることができるという特徴を兼ね備えており、まずはじめに、小グループ集団で学びの共有化を図った。朝の学級裁量の時間を使って、「自主学習ノート交流会」を実施した。発表者は、自分が工夫して取り組んでいる点やオリジナリティー溢れる自主学習の仕方を紹介していき、聞き手側はよかった点をピンク、改善点を青、意見や感想・質問を黄色の付箋紙に記入していき、KJ法を用いてまとめていった。また、小グループ内で「どんなことを意識して自主学習に取り組んでいるのか」、「どのくらいの頻度や時間でやっているのか」などをテーマに話し合いを行った。



図11 クラス内交流会の様子

児童は、自分一人の意見や価値観ではなく、様々な角度から考えを出し合うことで、発表者の作成例から自主学習ノートにおける解釈を広げ、これからのヒントを得るきっかけになっていた。この学び合い・高め合いがよい相乗効果をもたらし、どんどん自主学習ノートが充実・進化していった。

(2) 2年生との交流会

また、同様に朝の時間を使って、ペア学年である2年生を対象に自主学習ノート交流会を行った。丁度、2年生の自主学習の取り組みが軌道に乗りはじめた時であり、ペア学級遊びやペア掃除など、日々の交流の中で、「5年生の自主学習ノートを見てみたい」と言う声が多く上がり、交流会を開くことになった。5年生は、伝える相手を意識して、がんばっていることなどを細かく丁寧に説明したり、「自主学習をしてよかったこと」などを発表したりする様子が見られた。また、2年生も5年生



図12 2年生に説明をする様子



図13 2年生の発表の様子

の発表をしっかりと聞き、初めて知ったことや5年生のノートでよかったところなどをたくさんメモしていた。そして、発表会の後には5年生と2年生がペアとなり、5年生が基本的な自主学習のやり方や楽しく取り組むためのコツを自身のノートを参考に紹介していた（図12）。

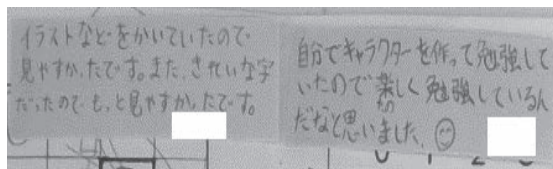


図14 5年生から2年生へのコメント

2年生は、5年生から教えてもらったことを自主学習ノートの中で体現し、様々な工夫を凝らしながら一生懸命取り組んでいるようであった。そこで、2年生にも5年生の前で、自主学習ノートの内容を発表してもらい、様々な角度から2年生のオリジナルのやり方（方法）や姿勢を吸収し、主体的な態度の育成に関する視野を広げることが目的と位置付けて行った（図13）。交流会の最後には5年生が2年生のノートにコメント書いていき、自主学習を通じた心のつながりも育むことができた（図14）。

IV 結果と考察

1 事前・事後アンケート

児童の学習習慣の形成や自主学習に主体的に取り組む力の高まりを把握するため、実施の前後で4つの質問項目を設定したアンケート調査を行った。アンケートの項目は表2の通りであり、各項目選択肢を4点～1点で換算し、実施前後を比較したグラフ（図15・16）においては、全体の割合を算出して示した。ここでは、質問項目1・3・4の結果から考察をする。

表2 事前・事後アンケートの内容

項目	質問内容
1	○勉強は好きですか。
2	○今よりも成績を上げたいですか。
3	○夢を叶えるためには、勉強が必要だと思いますか。
4	○自主学習ノートの取り組みは、役に立つと思いますか。

実践前、「勉強は好きですか」という質問項目1において、「とてもそう思う」・「そう思う」を合わせた割合は40.8%しかいなかったが、実践後は85.6%になり、自主学習ノートを通して、勉強の魅力や面白さに気づききっかけを与えることができたと考えられる。

また、「夢を叶えるためには、勉強が必要だと思いますか（質問項目3）」では、実践後に90.3%の児童が「とてもそう思う」と回答している。自主学習ノートの中で各教科の予習・復習だけではなく、自分が将来、就きたい職業を調べてきている児童も多かった。その中で、身に付けておかなければならない必要な知識を知り、興味・関心の幅や今できる範囲で、様々なスキルを磨いていくことの大切さを理解させることにつながった。同時に、「今のがんばりが、将来につながる」という努力投資の面に目を向けさせることができたと言える。

実践前、「自主学習ノートの取り組みは、自分の役に立つと思いますか（質問項目4）」では、「と

でもそう思う」と回答した児童は実践前、32.2%しかいなかった。この時、「やってみたい」という気持ちよりも「めんどくさい」という方が先行していた。中でも、4つのスモールステップに沿った系統的な指導を基盤として、クラス内交流会・2年生との異学年交流会、教師からのフィードバック、保護者の支援など様々な活動を通して、自主学習を「誰かが、がんばっているもの」という他人事ではなく、自分事として本気で捉えて取り組む学級の雰囲気が醸成されたこともあり、実践後の数値が大幅に上昇したと考えられる。

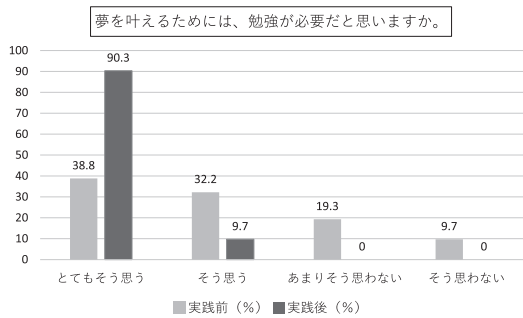


図15 質問項目3における実践前後の比較

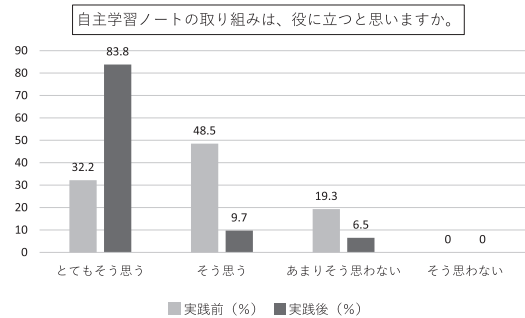


図16 質問項目4における実践前後の比較

2 学芸大式学習意欲調査

今回、自主学習ノートにおける一連の活動の学習効果を測定するツールとして「学芸大式学習意欲調査」を用いた。本調査は、下山(1985)らが学習意欲を8つの因子に分けて構成し、それらの程度を測るために作られたものである。測定ツールは、学習意欲に関する様々な動機づけの側面を網羅的に捉え、理論的根拠と対応するように設計されており、これ

表3 「学芸大式学習意欲調査」の内容

項目	質問内容
A	○いろいろなことが知りたいので、学校の勉強だけでなく、家でも勉強していますか。
B	○家の人に、「勉強をしろ」と言われなくても勉強をしていますか。
C	○言われなくても、苦しい勉強をしていますか。
D	○自分で目標や計画を立てて、勉強していますか。
E	○難しい問題でも、いろいろなやり方を考えてがんばっていますか。

までの研究報告によってその内部一貫性(信頼性)や妥当性が報告されている。そこで、本調査の本質は維持した上で、小学校第5学年の児童の実態や本実践の研究範囲に合わせて言葉を置き換え、質問項目を5つ抽出して実施した。抽出した質問項目は、表3の通りである。回答の選択肢は(4点:よくあてはまる・3点:あてはまる・2点:あまりあてはまらない・1点:あてはまらない)で換算し、事前・事後アンケートと同様に、実践前後を比較したグラフ(図17)においては、全体の割合を算出して示した。ここでは、質問項目D・Eの結果から考察をする。

実践前、質問項目 D の「自分で目標や計画を立てて、勉強していますか」において、「よくあてはまる」・「あてはまる」と回答した児童は合わせて 65% に満たなかった。だが、実践後は 90% を超える数値まで上昇し、4 つのステップとめあて（目標到達点）の明確化を通じた自主学习ノートの取り組みにおいて、児童の学習習慣を確立・定着させることができた。この項目が伸びた最大の要因は、約束

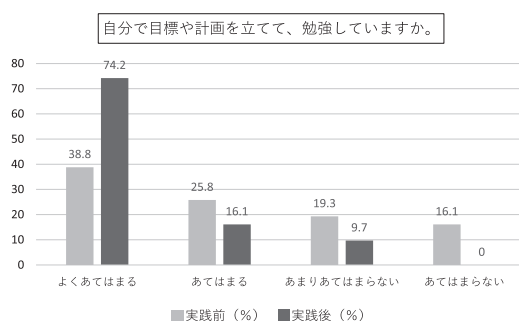


図 17 質問項目 D における実践前後の比較

事の中に自分で学習内容を設定して書くことや学習後には必ず振り返りをしてわかったことやポイントを整理させることを徹底したことである。また、振り返りを記入するだけではなく、次に同じ教科の学習をする時に見直して、学習課題を設定させ、苦手なことや課題にチャレンジさせるための手立てを講じたことも児童の自主学习における主体的な態度、自己教育力の育成につながった。質問項目 E の「難しい問題でも、いろいろなやり方を考えてがんばっていますか」においても、「とてもよくあてはまる」・「どちらかといえば、あてはまる」と回答した児童は合わせて実践前は 28.5% だったが、実践後には 64.8% に数値が上昇した。難しい単元において、普段はあまり自主的に取り組まない問題に対しても自分が楽しく理解できる方法を見つけ、何度も復習をしたり、解き方や覚え方をまとめたりをしたりするなど、最後までやり遂げる力を育めたと言える。

3 児童の家庭学習時間の変容

学級全体として児童の家庭学習時間は、年間を通して長くなった。実践前の 4 月は学級の平均家庭学習時間（塾を除く平日）は、42 分であったが、実践後の学年末の調査では 71 分に伸びた。この家庭学習時間の調査においては、4 月・7 月・11 月・3 月に一週間の定点調査を行い、継続的に児童の変容を追っていった。また並行して、電子機器（テレビやゲーム、スマホ等）の一日の使用時間（短使用群：1 日あたり 90 分以下、長使用群：1 日あたり 90 分以上と定義）も調査し、家庭学習時間との関係も明らかにすることにした。

杉村・藤田（1981）は、小学生におけるテレビ視聴時間と家庭学習時間の分析を行っている。「3～6 年生のいずれにおいても、短視聴群は長視聴群よりも学習適応性は優れていた。長視聴群の 3・4 年生では勉強の意欲、学校環境、心の健康の 3 項目が 5・6 年生では、勉強の意欲、テストの受け方、学校環境、根気強さの 4 項目が問題ありと判定された。5 年生では、国語と社会の 2 教科、6 年生では、国語・算数・理科・社会の 4 教科において短視聴群が優位に優れていた。また、調査対象の 3～6 年生のすべての学年において、短視聴群の家庭学習時間が有意に長かった。」¹⁰ という結果が示されている。また、田中（2017）は、家庭が学力向上にとってマイナスの環境となる可能性を示唆している。家庭における学習の困難点として、「教師というペースメーカーがいない状況で、子ども自

らがペースメーカーとなって進めていかないと
いけないこと、テレビゲームなどの学習阻害要
因が多く、誘惑にあふれた環境の中で自律的・
主体的に学ぶことが求められていること」¹¹な
などを挙げている。同様に、ヘファ・ベンベ
ティ (2018) は、家庭学習の5つの課題として
「①構成的な問題、②場所の問題、③スケジュー
ル/時間の問題、④動機づけの問題、⑤随伴
性の問題」¹²を挙げており、家庭学習に正しく

取り組むことで他のパフォーマンスにもよい影響が出ることを示唆している。対象学級においても、電子機器を長時間使用している長使用群に比べて、短使用群の方が家庭学習の時間が長いことがわかる (図18)。自主学習ノートの取り組みの実践前は、テレビやゲーム、スマホ等の電子機器の長使用群の児童は「学年 (5) × 10分 = 50分」の学習時間にも満たなかった。実践後は、短使用群・長使用群ともに家庭学習時間は長くなったが、短使用群の方が学習に取り組む時間が大幅に長いことがわかる。この結果からテレビやゲーム、スマホ等の電子機器は、学習における阻害要因となる可能性が高く、使用する時間やメリハリのある学習習慣の確立とともに、学びに向かう人間性を含めた学習意欲を向上させることが主体的な態度につながり、近くにある誘惑を断ち切る原動力になり得ると考えられる。また、保護者の直接的な介入の跡が見られる児童ほど、家庭学習の頻度や時間が長く、主体的に取り組む意欲も高いことがわかった。学習習慣を身に付け、日々の学びのサイクルを整える方策をあらゆる機会を捉えて実践することが不可欠であると言える。

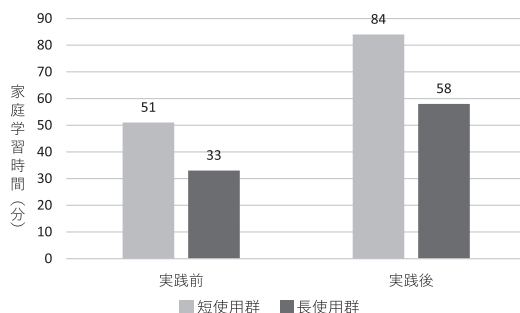


図18 電子機器の使用群と家庭学習時間の関係

4 自主学習ノートの取り組みと学力成績

一週間あたりの自主学習ノートの提出頻度
と一年間の国語科・算数科・理科・社会科の
テストの平均得点を個別に調査し、集計をし
た。結果を散布図に表したものが、図19であ
る。一週間に3回～5回提出する児童におい
ては、テストにおいて常時、高い得点水準を維持
している。また、3回～5回の群において、回
数でテストの平均得点にあまり差はなかった。
だが、週に2回以下のすべての児童 (7人) は

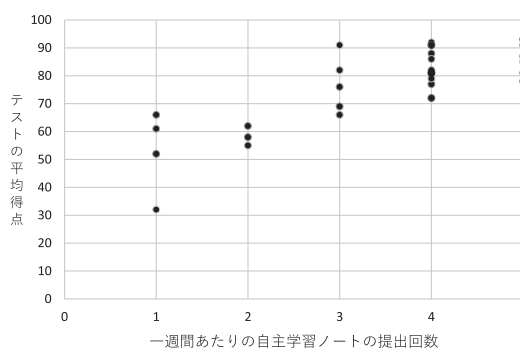


図19 ノートの提出回数とテストの平均得点

70点以下であった。この一週間に2回程度しか提出しない児童の特徴は、自主学習ノートにおいて、「テストの前にとりあえずやる」という形だけの勉強になっていることであり、授業後にもう一度同じ問題あるいは、類似問題に取り組んだり、まとめ直したりするという形跡がないということである。

自主学習に取り組む頻度が多いほど、学力が高い傾向にあるのは、本実践や全国学力・学習状況調査の結果を踏まえてもわかるが、何より根底にある「①学習習慣の確立、②学習意欲の向上、③主体的な学び」の3つを実現させるためのアプローチが非常に大切である。

V 成果と課題

1 今回の実践における成果

(1) 学習習慣の確立に向けての一助となった

自主学習の取り組みでは、「事前・事後アンケート（4項目）」、「学芸大式学習意欲調査（5項目）」、「児童の家庭学習時間の調査」のいずれにおいても数値が上昇し、高い水準を維持していることから、児童の学習習慣を確立する上での一助となったと考えられる。これまで、ほとんどの児童が「やらされる自主学習」、いわゆる宿題で出される自主学習をしていたが、クラスの75%の児童は一週間に3回～5回程度、自分から進んで自主学習に取り組むようになった。これは、自主学習ノートという家庭での学びの中に、学校教育において4つのスモールステップに沿った自主学習を実現するための基礎的段階における指導を確実にを行い、主体的に取り組む態度を保障する「自分だけの自主学習ノート物語」が学習の連鎖と確かな学力の定着につながったからであると考えられる。

(2) 主体的な学びを実現できた

自主学習を実現するための基礎的段階において、主体的な学びを実現する上では、約束事は徹底させるが、自由度は担保し、必ず教師側からのフィードバックを行うことが不可欠である。児童の学習意欲を引き出す特効薬は、「できなかったことが、できるようになった」という成功体験の積み重ねと周囲からの承認である。普段の学校生活では、あまり目立たない児童が自主学習ノートの中で毎回、筆者に向けてクイズを出題したり、ノートの端に線をひいて、大事なことをメモする欄を設けたりするなど、様々な工夫をしている姿が多く見られた。また、付箋紙やマーカーペンなどの学習効果や効率を向上させるためのツールを使って、何度でも見て学び直せるノート作りがなされていた。

教師は、主体的な学びの土台となる「粘り強く取り組もうとする側面」、「自らの学習を調整しようとする側面」を適切に見取り、児童一人一人の自主学習に対する肯定的な評価を積み重ねていくことが重要である。

2 今後の課題

自主学習は、児童の主体的な取り組みを前提とし、内心の自由とも関わるほか、位置付けとしても私教育や児童の権利保障とも大きく重なりを持つものである。そのため、実践の際には目の前にいる児童を主軸とした幅広い観点を考慮した取り組みが不可欠であると考えられる。

以上のことを踏まえ、今後の自主学習における実践研究において、「誰一人取り残さない持続可能な取り組み」、「児童の『個別最適な学び×協働的な学び』のベストミックスをどうデザインしていくか」という部分にも力点を置き、令和の時代に即した自主学習の在り方を模索していきたい。

【引用文献】

- 1 藤沢伸介 (2002)「家庭学習の質的低下の現状」東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センターネットワーク：年報 第4巻 p4
- 2 藤村美由紀・杉本任士 (2019)「小学校における望ましい家庭学習を推進するための方策 —教育実践家・教育学者の宿題に関する論説を通して—」北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要 第9巻 p146-147
- 3 伊垣尚人 (2012)「自主勉ノートの作り方」ナツメ社 p28-29
- 4 江森英世・高野貴重紀 (2017)「主体的な家庭学習への転換に向けた研究」群馬大学教育学部紀要 自然科学編 第65巻 p1-2
- 5 南幸江 (2015)「学習方法を身に付け、自ら学ぶ生徒の育成 —家庭学習の定着を目指す取組—」上越教育大学学校教育研究センター 教育実践研究 第19集 p259
- 6 水野里恵 (2019)「学齢期の子どもの家庭学習・授業態度を子どもの気質と母親の介入度との観点から考える」日本教育心理学会 第61回総会発表論文集 p7
- 7 天笠茂 (2013)「家庭学習を問い直す」児童心理 2013年2月号 臨時増刊号 No.963 p1-10
- 8 堀哲夫・仙洞田篤男・芦澤稔也 (2014)「自主学習ノートへの挑戦」東洋館出版社 p72
- 9 前項8と同書 同頁
- 10 杉村健・藤田正 (1981)「小学生におけるテレビ視聴時間と家庭学習時間の分析」奈良教育大学教育研究所紀要 第17巻 p87
- 11 田中博之 (2017)「アクティブ・ラーニングが絶対成功する！ 小・中学校の家庭学習アイデアブック」明治図書 p11
- 12 ヘファ・ベンベヌティ (2018)「学業的成功と自己効力感、家庭学習 —なぜ学習の自己調整力と学業的満足遅延が必要なのか？—」教育心理学年報 第57集 p238

【参考文献】

- 日本教育工学会 (2000)「教育工学事典」実教出版
- 本間信治 (2010)「大丈夫だよ。YOU ARE OK!—自己肯定感を育む教育を—」清風堂書店
- L. ダーリング-ハモンド (2017)「パワフル・ラーニング」北大路書房
- 福山憲市 (2018)「自主学習システム&ノート作成法」明治図書
- 主婦の友社 (2019)「やる気スイッチが入る秋田県式家庭学習ノートで勉強しよう」主婦の友社
- 森川正樹 (2020)「小学生の究極の自学ノート図鑑」小学館
- 梅田明日佳 (2020)「ほくの『自学ノート』」小学館